

ちよつぷいっ話

第一五四号

早も暮れゆく

今年の紅葉は見事なものでしたが、いよいよ十二月をむかえ、暮れようとしています。美しかった紅葉を見て不機嫌になる方はまずないと思います。自然の力には及ばずとも私も人々を感激させる事がどのようにしたらできるのか、もちろん信仰を基盤としてですが、身に付けたいものです。年年歳歳年を重ねるだけでは誠に申し訳ない事になってしまいます。今年も当山に於いては何事も無く全ての行事を遂行させて頂きました。偏に檀信徒の皆様の協力があったればこそ感謝し御礼申し上げます。娑婆世界は今年も紆余曲折、色々ありました。ベネチアの水害を始め、多くの天災に遭遇。尖閣諸島の問題では隣国のデモで大きな損害を被りました。シリアでは依然として内紛が続いています。政治の混乱も人災とはいえ大変な迷惑でした。我々人間の不幸、苦楽、善悪は外圧内圧に因って齎されると思います。勿論、人間関係のみならず、自然環境を含め、社会生活を営む上で起こりうる現象全てに当てはまります。結果はおのずと信仰の軽重にもよるでしょう。そんな中僧侶としての役割は何ぞや、考えさせられます。

日本にも優れた僧侶が多く実在されました。遊行の上に道半ばで遷化された僧侶も多かったと思います。釈尊もそうであったように、俗世間にあつて妻帯したのち妻子を捨てて出家した者、西行法師はその代表格でしょう。法然上人のように自分の宗教観で妻帯せずの者、親鸞のように妻帯をした人。生き様は夫々ですが「目的は救いと成仏」にあり、立派に僧侶としての任務を遂行され、役割を果たされたと思っております。現在も私が知らないだけで多くの卓越した僧侶が活躍してみえると思います。私は思想の神髄は変わるものではありませんが教化は時期相応にしないではずならず、世の為人の為、僧侶としての役割も当然変わってくると思います。

昔は信仰の基盤に危機感があつたと思います。一番は戦であり、二番は疫病と生死を左右する突然の非常事態が苦悩の原点であつたと思われれます。平和な現在は突然の非常事態といえれば地震の事でしょう。信仰も浅くなり、現在の人間模様を見えますと、観光的に寺院を訪れる人が多くなり、自然に寺院も観光客相手と成り、腰を据えて祈りを捧げる事ができる寺院が少なくなつてしまいました。私は本質的に寺院にあるべき姿を取り戻す必要があると思っております。観光から礼拝に結び付くように、霊場巡りのように納経が主体となつては信仰の間違いを起しやすいつ思ひます。拜もうと思つても御本尊（御仏像）を拜する事も出来ないとなれば凡夫はただがっかりし、落胆するばかりです。佛が密像佛ならば御前立本尊様が拜めるようにしなくてはやがて巡る人々がいなくなるでしょう。建造物に付加価値があつても若者は確証を求めていると思います。見て見ぬふり、聞いて聞かぬ振り、知つていて知らぬ振り、知らぬのに知つた振り、振り振り人生とは、おさらば「して、真実一路」に良い年をお迎えください。

二十四年十二月一日

善壽男善入院油掛地藏尊